



TITLE:

<批評・紹介>矢野主税著「門閥社會成立史」

AUTHOR(S):

東, 晉次

CITATION:

東, 晉次. <批評・紹介>矢野主税著「門閥社會成立史」. 東洋史研究
1977, 35(4): 694-699

ISSUE DATE:

1977-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153641>

RIGHT:

批評・紹介

門閥社會成立史

矢野主税著

昭和五十一年二月 東京 國
書刊行會 A5判 五七〇頁

本書は、門閥社會を一貫して追究してこられた著者が、門閥社會の形成過程について新しく書き下されて成ったものである（序章・第一章はすでに發表されたもの）。先に公刊された『門閥社會史』や幾多の諸論考と合わせて、著者の門閥社會研究が本書によって一段落したわけである。

紹介に先立ち、本書の章目を列記しておくのが便利であろう。

序章 門閥貴族の系譜試論

一章 「門閥貴族の系譜試論」再説

二章 後漢末期の郷邑の實態について

三章 後漢宦官の性格について

四章 後漢官僚の處世の術について——寄生官僚制解明のために——

五章 後漢寄生官僚制論

六章 門閥の超王朝的性格について

七章 曹操集團の性格の一考察——寄生官僚制解明の爲に——
結語 後漢社會から魏晉社會へ——中正制を手掛りとして——

序章は、著者が年來主張する「寄生官僚制」論の出発点となった論文である。まず著者は、後漢時代における家柄の固定化、高級官僚層の出現という、諸家によって指摘されている事實をふまえ、後漢官僚は即ち豪族であるという従来の説に疑問を提出する。即ち、官僚即豪族の理解に立てば、官僚家の極端な貧困という現象は考えられない筈であるのに、事實は相違して、果世官僚家（二代以上高級官僚を出した家）においても極端な貧困を傳えるものが案外多いことを指摘する。更に進んで、貧困の原因に官僚の清潔な生活を挙げ、それは窮極的に俸祿の不十分さによるとし、貧困な官僚家が多いことと合わせ考えることによって、「後漢官僚は俸祿によってその生活を支え、中央政權に寄生する生活を送っていた」し、「彼等は豪族に屬する、經濟的實力をもつ、自立的勢力などではなかった」と推定する。次に、曹操政權下における官僚について、後漢末清流グループに六朝貴族の源流を求めた川勝義雄氏の説を批判し、後漢と魏・西晉との官僚には血縁の系譜關係がない、即ち「官僚社會の構成メンバーにおいて斷絶はある」が、官僚の寄生的性格という点において共通する側面を有するとする。又、曹魏政權に参加した土着豪族の動向にふれ、彼らが故郷を離れて曹魏政權に完全に寄生する態度をとったことを指摘し、官僚即豪族の考え方を否定している。

次の第一章には論點が二つある。一つは、漢帝國の在るべき姿を理念化したところの儒家イデオロギーによって結合した黨人の組織を統一的な團體として理解してよいかどうかという點。第二に、宦官誅滅後、清流・濁流の對立が解消したのであるから、反宦官グループである清流に變化が起こったのではないかとすればそれはど

のような變化なのかという點である。

前者について、著者は、黨人とは黨人側にそれを決める條件、規準がなく、宦官側からの押しつけによるものであることをまず確認する。そして、黨人を「中心的黨人」(反宦官、行義清英の人々で、名士番付に多く入っている)と宦官側から黨人と目されただけの黨人に分ける。ところで、「中心的黨人」には名士が多いが、名士であっても必ずしも黨人ではない人々(郭泰・袁閔など)の存在を著者は注視する。ここから、「清流勢力のその中心的人々は黨人ではあったが、必ずしも名士で」はなく、黨人とは政治的用語であり、名士は社會的なそれである。してみると、「清流と濁流との對立は、後漢末期政局の主導権争いであり、權力闘争であつた」と考えられるのではないかと結論する。

清流派變質の問題。著者は、黨綱後、特に宦官誅滅後の清流人士の動向に關する諸家の説を援用し、潁川の清流系知識人が現實に對してどのように身を處したかを検討し、清流グループに屬する知識人がそれぞれの判斷によつて多様な處世を示すが、保身・保家によつて「曹魏政權と密着した人々こそ、門閥を形成した」という著者の理解を強調している。そして、清流系知識人が主體的に曹操政權を創出していったとする川勝氏の見解を批判する。

第二章は、主として後漢における婚姻の實態を検討し、郷邑の秩序の問題を考えようとする。著者によれば、當時婚姻に對する一般の通念として、①同郡であること、②大體相似た社會的地位者間において行ひ、の二原則が存在したとされる。ここから、「郡單位の一種の地縁的生活體が存在した」と、「安定した社會階層秩序があつたこと」を著者は事例を擧げて導き出し、當時の郷邑秩序は復

數豪族によつて引き裂かれていたとする川勝説を批判し、引き裂かれた郷邑があるとしても、豪族間の對立に由るのではなく、豪族對小農氏の對立に由るものとする。又、「中央官僚家の成立の過程において、それらの人々の生活圏が漸次擴大」していくとともに、婚姻圏も郡縣から他州郡へ、更に京師(全國的婚姻)へと擴大してゐることを指摘し、中央官僚にとつて郷邑とは中央官僚社會そのものであつて、階層によつて郷邑も異なつていたとする。そしてそこから、「中央における宦官と清流勢力との對立が、地方における濁流系豪族と清流系豪族との對立、すなわち、引き裂かれた地方郷邑の實態に根ざすという直線的理解が、必ずしも正しくないことを示す」という批判を導き出してゐる。

第三章では、宦官を豪族乃至豪族的存在と見ることができ、か、という問題を提起し、宦官家は一般的に名門ではなく、家としての連續性もないことを指摘する。次に、楊聯陞・川勝兩氏の説を「擬似豪族論」として批判する。宦官による「私的支配の權力機構」は豪族を背景にした外戚權力とは異なり、兄弟・賓客・中央官僚との結合はあり得ても、利益を同じうする者同士のグループにすぎず、宦官全體の結束にまではなり得ない。従つて、「宦官政府」という用語は成立しない。又、地方の上級權力(太守・刺史)と結ぶ方が有利なのであつて、宦官勢力と豪族を直ちに結びつける理解は安易であるとする。「後漢宦官は、豪族でもなければ、豪族的存在でもない」というのが著者の宦官理解なのである。

第四章では、後漢代の寄生官僚の處世の術の種々相を取り出し、著者の「寄生官僚制」論の具體化を試みている。積極的と消極的の

二種があり、前者は黨的結合を指す。著者によれば、黨の本質は「保身・榮達の爲にグループを組む」ところにあり、權威に寄生することによってそれは成立する。このような理解からすると、外戚・宦官の黨的結合は勿論、所謂清流グループ、特に黨錮時期のそれも、「儒家的國家觀に立つて宦官政治を批判」するという名目を利用して保身・保家の黨的結合體となる。黨が前漢宣・元以後出現することは増淵龍夫氏によって指摘されているが、著者はこれを、宣・元以後の「寄生官僚制」の進展と解釋するのである。次に消極的なそれとして、(1)政治における中立的立場、(2)政治的發言をつつしむこと、(3)止足（知足）、(4)隱逸の傾向、それぞれに具體例を挙げ、これらも皆、寄生官僚の保身・保家の處世術であるとする。最後に、官僚自身の持つ政治意識からその寄生性を考えるために、『食祿之家』の論理」を検討する。即ち、『支配階層としての中央官僚は、被支配者の利益を奪わないという、『支配者の論理』を政治意識の規範としてもっていた」ということは、『中央官僚たる者は、全く俸祿によって生活すべきであつて、一般人民のように、土地にたよる經濟生活をすべきではない』ことを示している。とすればそれは、生活の基盤を中央權力に依存している寄生官僚の生活そのものであり、又、彼等が寄生官僚として自覺していたことを示すものである。そして、彼等がそのような自覺に立つことによって、『累世官僚という家柄は確立・存続した」と著者は言う。

第五章では、前漢・後漢の官僚の生活を、豪族のある一家が地方から離れて中央に集まり、次第に土着性を喪失していくという精神的側面に焦點をしばつて分析する。まず、前漢の官僚で經濟的に不自由な生活を送つた人は後漢のそれに比べて少い。ということとは、

彼らが俸祿以外にも收入の道を有していたからではないかとする。又、生活の根據地についても、平生長安で生活していた高級官僚達も、郷里にはなお生活の場としての家が存在していた。ところで、前漢末から「歸故郡」という表現が用いられるようになるが、これは、「既に現實の生活の場を中央にうつし、漸く故郷から離れつつあった人々のその現實が、前漢末成帝頃から、一族の根據地を『故郡』として意識せしめるに至つた」ことを示している。又、陵縣への移住者は、本質を變更し、政府の保證を得て國家權力によりすがりながら生活する寄生的性格を有していたとする。次に後漢に入ると、中央で生活する高級官僚家の發生と固定化による故郷の一族からの分離が進行し、「歸葬」も一般的慣習として行われたけれども、それは實際生活の上で土着勢力によって支えられていることを示すのではなく、逆に、官僚としての平生の生活の場と本質と墓地とが分離したことを示す。これが著者の言う「故郷の分裂」であるが、これも次第に解消の方向へ向う。即ち、新たな墳墓の地が、「賜家地」などによって京師周邊に形成されていく傾向がみられる。これこそが「寄生官僚制」の進展を物語る一證となると著者は言う。

第六章では、門閥が超王朝的に存続し得たのは何故かという問題を提起している。まず、川勝義雄・谷川道雄兩氏のこの問題に関する見解を、全國的士大夫團は成立していないこと、郷品と官品の對應關係も、上下二品の幅があつて直ちには郷論が官品に對應せず、國家權力の意志が介入する餘地が残されているところから、郷黨社會の全き自律性にも疑問がもたれること、九品中正法が郷舉里選の精神を繼承し、郷論にあらわれた共同體原理を國家・社會全體に貫徹させるといふ基本精神を有していたとする見解は、郷論が共同體

全員の意志を代表するものではなく、又魏朝の人才登用の方針が能力主義であるし、中正制の運営も中央中心で、郷黨の意志を積極的に汲み取ろうとするものではない点から疑問があること、などによって批判する。そして著者は、貴族層が新政權に反抗しない限りにおいて、即ち新政權に寄生することによってのみその特權的身分を保證され、王朝を超えて存續し得たとする。

第七章は、劉邦・劉秀・曹操それぞれの集團の性格を検討する。

曹操集團が劉邦・劉秀のそれと異なるのはその超郷黨性にある。劉邦・劉秀の集團が地緣的・血緣的關係による結合を有していたのに對し、曹操のそれは、血緣的關係を核としながらも超郷黨的に全國から任用された人々によって構成されていた。その理由として、①曹操の人材登用方針が能力主義で、地緣・血緣を問わないこと、②後漢末における生活圏の擴大に伴う人材の中央集中化（交友範圍と人物品評の超郷黨性）、の二點を挙げる。更に著者は、曹操集團を單なる任俠者の集團としては捉えず、「王法・君道」など君臣關係を律する規準を具有したものと考え、文帝以後の超郷黨の方針採用によって天下統一への道が開けると共に、流動的な君臣關係がみられるけれども、法による行政體制＝官僚制が成立したのも曹操集團の性格に由るとする。そして、かかる超郷黨的集團の成立は、「後漢時代における、地方勢力と中央官僚の分離、官僚豫備軍の中央集中、國家權力によりかかろうとする官僚層の成立」を示すと云う。

最後に、魏・西晉初頭における諸々の中正制批判を検討し、それらは、「有力官僚中心の州中正制を廢止或は修正して郷里選、實質的には郡中正制に返れ」というものではないかとする。更に、司馬氏政權と上流士人層の密着による州中正制の貴族主義的運営によ

って門閥社會が成立したとする岡崎文夫氏以來の中正制解釋に著者は不満を示し、個人中心の能力主義によって創められた中正制が、なぜ家柄主義・門閥主義に變質していくかと自問し、それは、「後漢時代以降の、顯著な世の中の貴族化の大勢に押し流されたもの」であると自答している。「中正制の運用によって門閥社會が成立したのではなくて、社會の貴族化の潮流に従って、中正制はその性格を變えていった」とする著者は、後漢以來の「寄生官僚制」の進展こそがその貴族化の潮流だと考えている如くである。そして、後漢末期を第一次門閥社會の成立期、魏・西晉期を第二次、江南における南朝人の門閥社會を第三次門閥社會の形成と劃期している。

以上、要約が長くなつたが、終章において見た如く、本書は、門閥化が當時の歴史の必然の方向であることを、後漢にまで遡って、種々の面から論證しようとしたものである。その中で著者が最も強調しているのは、後漢に入ると中央高級官僚家が徐々に固定化し、それらが中央官界において俸祿に頼る寄生的性格を強く帯びつつあるという點である。この傾向の延長に、魏晉貴族制の成立があると著者は主張する。この點、魏晉貴族制の成立を、後漢末黨錮事件を媒介にして、清流派知識人の自立性に力點をおいて論じた川勝義雄氏の見解を批判しようとする所にも本書の目的が存する。

評者は、序章、第一章を除いてすべて書き下されたこの勞作を通じて、著者のエネルギーな門閥社會史解明への熱意に敬服すると同時に、今後の後漢史研究にとって重要な問題が指摘されていると感じた。例えば、前漢末から顯著になる黨的结合の問題がそれである。著者は、本來單なる「なかま」を意味した黨が、政治

的意味を帯び、「保身・榮達やその手段としての權力への依附」を求める人々の利害關係によつて結ばれたグループを意味するようにになると考え、黨的結合の盛行を官僚の寄生的性格の増大と解釋する。後漢政治上無數に出現する黨を以上のように解することが妥當であるか否かはにわかに断じ得ないが、後漢政治史を考える際、看過し得ない問題であろう。外戚・宦官・官僚の三者は、それぞれ黨の形態をもつて政治世界に登場しているからである。

又、著者の指摘で興味深いのは、後漢官僚における「故郷の分裂」である。著者は、後漢官僚の土着性の喪失、寄生化の説明として取り上げているのだが、問題はそれにとどまらず、後漢官僚の精神、政治意識を考える場合の一ポイントになるのではなからうか。後漢官僚にとって郷里社會とは何か、ひいては、後漢王朝が郷里社會に眞に基盤を置いていたかという問題にまで連なるように思う。この問題と關連して、著者が強調する、豪族と官僚の區別の問題も、後漢期における豪族と官僚の關係如何という點から検討される必要がある。他にも、婚姻圈の問題、劉邦・劉秀・曹操各集團の性格の相違など、興味深い指摘が多い。

このように、本書は評者にとってきわめて示唆的な點を多く含んでいるが、疑問を感じる點もないわけではない。本書のテーマたる「寄生官僚制」についてまず言及しておく。

著者の「寄生官僚制」説の論理は、序章においては展開されている。それによると、官僚の貧困な生活は、俸祿の不十分さ、俸祿のみによる生活（他の産業を営まない）に原因があるが、有力豪族の代表的な家と目されるものにも多くの貧困を傳える例がある。とすると、「彼等は豪族に屬する、經濟的實力をもつ、自立的勢力な

どでは」なく、「官僚たることをつづけるに従つて、財を失ひ、土着的自立性を失つて、中央政權に寄生する性格」をもつようになつたと考えざるを得ないと。これに對しては次の二點について疑問を感ずる。

(1) まず經濟的な面に限つて言えば、「官僚は俸祿によつてその生活を支え」ているところに、「寄生」の最大理由が存する。しかしそうすると、官僚というものは超時空的に寄生的性格を免れ得ないものになつてしまふ。かかる意味における「寄生」という概念を用いただけでは、各々の時代における官僚制の歴史的 성격の分析が不可能になり、漢代から現代までの中國の官僚制を「寄生」官僚制と規定せざるを得なくなるのではなからうか。この點、著者も經濟的側面だけに満足せず、官僚の處世術Ⅱ「保身・保家」や政治意識Ⅱ「支配者の論理」の指摘によつて、精神的にも彼らは王朝に寄生していたとは言ふ。しかし、「支配者の論理」に自覺的であることが何故「寄生」的であるのか理解しがたいし、著者の指摘するような苟合的官僚の存在は否定できないとしても、李固以後の清流官僚の行動を想い起こすと、保身的寄生官僚の語で、後漢末期の官僚の在り方を規定してしまうことに評者は躊躇を覺えざるを得ない。魏・西晉期の官僚についても同様なことが言えると思う。このことと關連して言えば、著者の言う「保身・保家」を單なる日和見主義・利己主義の意に解しては、特に後漢末期の人々の内面を充分把握されないのではなからうか。というのは、この時期の人々の「明哲保身」の態度は、漢代の世界の崩壞によつて秩序の外に投げ出された人間が、新たな人間の生き方・人間社會の秩序を模索する姿を示しているのではないかと思はれるからである。

(2)貧困の原因に「散祿賜」がある。著者はそれを貧困の原因としてしか意味づけていないが、貧困となるにもかかわらず「散祿賜」するのは何故かという問題があるのではなからうか。評者は、官僚たるもの清潔たるべし、財を貪ってはならぬという當時の價值理念がその行爲の基底に存するのではないかと思う。しかも「散」する對象は大體宗族が多い。このように考えると、「散祿賜」とは、官僚の倫理的要請から起り、宗族との精神的連絡を保つための手段だという解釋も可能になると思う。その意味で、彼らはきわめて自覺的な存在なのであって、貧困であればあるほど寄生的性格がうすいという解釋も成り立ち得るのではなからうか。

以上が「寄生官僚制」説に對する評者の疑問であるが、「寄生官僚制」展開の原動力Ⅱ主要因は何か、更に、一次、二次、三次と劃期されたそれぞれの門閥社會に質的相違があるのかどうかといった疑問が、通讀するうちに湧いてきたことを附け加えておく。

最後に、本書全體に對する感想を述べて拙評をおわることにした。

著者は、本書を通じて、この時期の社會は私的利害關係によつて展開すると、暗に主張しておられるように評者には受取れた。著者はそれをネガティブなものとして考えておられるだらうが、果してこの時期の社會はそのような私的利害關係のみによつて動いているだらうか。評者は、私的利害關係による動きとそれを克服しようとする動きが對立・媒介し合っているところにこそ、この時期の歴史展開の原動力が存すると思うのだが、それでは、それらがどのように對立・媒介し合っているのか、この點も本書を通讀して考えさせられた問題の一つである。

(東 晉次)

モンゴル秘史——チンギス・カン物語——

村上正 二譯注

平凡社(東洋文庫一六三 二〇九 二九四) B 40 判
全三卷 1 昭和四十五年五月 三五五頁(地圖系圖
各一葉)、2 昭和四十七年四月 四三三頁、3 昭
和五十一年八月 四四六頁(通卷索引、地圖一葉)

本書は、チンギス汗時代のモンゴルに關する最も主要な史料の一つである『元朝秘史』全卷の譯注で、底本には四部叢刊本を用いる。全十二卷を三部に分け、1(卷一〜四)、2(卷五〜八)、3(卷九〜十二)と收められており、總頁數は千頁を優に越える壓倒的な鉅冊となっている。本譯注に先立つて、我國には四種の翻譯が刊行されていたが、今回の村上氏の譯業の日本に於ける「秘史翻譯史」上の位置を確認する爲の前提として、それらを列舉してみよう。

一 那珂通世 一九〇七年 『成吉思汗實錄』 大日本圖書〔底本
Ⅱ文廷式寫本〕

〈新版(一九四三年筑摩書房)には各種索引、文獻目錄、その他の付載を加える。但し、元版と頁當り行數が異なるので、頁數にズレが生じ、參照引用に多大の障礙を來たすに至った〉

二 小林高四郎 一九四〇年 『蒙古の秘史』 生活社〔底本Ⅱ葉
德輝本及び四部叢刊本〕

へなお、同氏『元朝秘史の研究』(日本學術振興會 一九五四